

がんを経験した先生のお話

今から19年前の夏、40歳という区切りの年に初めて人間ドックを受診する機会を得て、早期の「大腸がん」が見つかりました。当時、学年主任を務めていた私は体調も良く、全く病気とは縁のない状態でした。人間ドックで提出した検便で、潜血反応が認められるとのことから、夏期休業を利用して地元
の公立病院で大腸の精密検査を受ける事になりました。

まず、大腸内にバリウムを入れてレントゲン撮影を行う「注腸透視検査」を行ったところ、主治医から気になる影が写るとのことから、さらに診断の精度高めるため、直接大腸内にカメラを挿入する「大腸ファイバー検査」を実施。その時、モニター画面に直径5mm程度の隆起物が写り、その場で早期の大腸がん（直腸がんステージⅡb）と診断され、開腹手術の実施が決まりました。

手術日を決める診察の際、院長先生が「よくこの大きさで発見できましたね。本当に幸運ですよ。」とおっしゃったのが今でも脳裏に残っています。すなわち、「がん」は早期の段階では自覚症状が全く出ない病気であって、この段階では発見しにくいものなのです。残念ながら、自覚症状が出てから発見されるがんは、少なくともある程度の進行が認められる「進行がん」となっていると思われます。

がんになった人は誰も「まさか自分がんになるとは！」と思うでしょう。しかし、現在は2人に1人が「がん」になる時代です。「がん」は決して怖い病気ではありません。でも決して侮ることのできない病気です。

「がん」を経験して、「がん」を克服する上で一番大切なのは、「がんをどのステージ（進行度合い）で発見するか。」にかかっているとつくづく思います。今では、早期に発見できればほぼ完治できる時代になっています。高校生の若いときから「がん」に関心を持ち、がんになるリスクを低くする生活習慣を実践するとともに、正しい知識をもって「がん検診」を受けることで、大切な自分の命、そしてかけがえのない家族や友人を「がん」から守りたいものです。

奈良県立吉野高等学校 上田裕康 校長



若いうちから、がんについての正しい知識や検診の必要性について知ることは、とても大切です。

今日からできることを考えてみよう！



自分ができること

身近な人に対してできること